

新国立競技場の聖火台に関する検討ワーキング・チーム（第1回） 議事要旨

日 時：平成28年3月11日（金） 11：00－12：00

場 所：内閣府本府3階特別会議室

出席者：遠藤 利明 東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣
中川 真 内閣官房新国立競技場の整備計画再検討推進室総括審議官
芦立 訓 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推
進本部事務局総括調整統括官
高橋 道和 スポーツ庁次長
中嶋 正宏 東京都オリンピック・パラリンピック準備局長
布村 幸彦 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長
中村 英正 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会企画財務局長
池田 貴城 日本スポーツ振興センター理事・新国立競技場設置本部長
平岡 英介 日本オリンピック委員会専務理事
山脇 康 日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会委員長

1. 遠藤オリ・パラ大臣より冒頭挨拶

- ・本日は、聖火台に関する検討ワーキング・チームの第1回会合になりますが、お忙しい中お集まりいただき感謝申し上げます。
- ・3月3日に調整会議が開催され、馳大臣の調整会議委員就任や、私からは新国立競技場の状況について、組織委員会からは人事について報告があった中で、聖火台の話も出てきた。
- ・聖火台については、従来計画の時にも決まっておらず、新しいプロセスの下でも事務的には議論していたようだが、開閉会式のセレモニーとも密接に関連する事柄であり、セレモニーの内容が決まっていない設計段階では対応困難との理由などにより、技術提案の要求水準に盛り込むことは見送られ、後日検討する課題として整理されてきた。
- ・通常、大会開催の2～3年前から開閉会式のセレモニーの検討が開始され、聖火台への点火の仕方も議論されると組織委員会から聞いていたので、これまで聖火台の場所は議論されなかったのだと思う。
- ・このたび、皆様も御心配をされたので、私の下でワーキング・チームを設置して議論することになった。
- ・皆さんから色々な意見を頂きながら、また、過去の例も見ながら議論を進めていきたい。
- ・本ワーキング・チームでは、設置主体・費用負担などの問題もあるが、これは、どんなものを作るかがわからないと議論できない部分もあるので、まずは、聖火台の設置場所

に関する基本的な考え方を整理し、連休前に取りまとめを行いたい。

2. 議事

○内閣官房新国立競技場の整備計画再検討推進室の中川総括審議官から、「(1) これまでの経緯・検討事項・今後の進め方」について説明があった。

- ・今後のワーキング・チームの運営については資料1のとおり、会議は原則として非公開とするが、配布資料及び議事要旨については、議長が特に必要と認める場合を除き、公表することが合意された。
- ・これまでの経緯及び検討の基本方針については、それぞれ資料2、3のとおり合意された。

○東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の中村企画財務局長から、「(2) IOCのルール」及び「(3) 海外事例の報告」について説明があった。

- ・IOCガイドラインでは、「聖火台はオリンピックスタジアムに配置するべきである」、「聖火台は機械的ではなく人の手によって点火されなければならない」、「オリンピックスタジアム内の観客全てから見える場所に配置すべきである」、「公衆の関心も高いため、競技期間中はスタジアムの外にいる人々からも見えるよう、可能な限り目立つ場所に配置すべきである」、「スタジアムが屋根で覆われているなど構造上、スタジアム内外全ての観客の希望を満たすことが不可能な場合もある」とされている。
- ・なお、不可能な場合も想定されているため、「しなければならない」ではなく「すべき」となっており、「そのような場合はIOCに配置場所を提示し承認を得る必要がある」などとされている。
- ・海外事例について、2000年シドニー大会では、スタジアムの中で点火され、競技中は会場内外から視認可能なスタンド上部に設置され、大会後は公園のモニュメントとして活用されている。
- ・2004年アテネ大会では、スタジアムに隣接する形で聖火台が設置され、折れ曲がるような形でスタジアムの中で点火され、競技中は聖火台が垂直に戻りスタジアムに隣接する形で会場内外から視認可能な形で設置され、大会後も同じ場所に存置されている。
- ・2008年北京大会では、屋根の縁に立てた形で設置され、競技中は聖火台の真下の観客を除く会場内外から視認可能な形で設置され、大会後は近隣の広場にオブジェとして移設された。
- ・2014年ロンドン大会では、大会に参加したNOCの数である204個の花弁を1つの聖火台に見立て、これをスタジアム内で点火した。その後、火の種をランタンに保存した上で、聖火台の火は一度消された。その後、聖火台はスタンドの通路に移され、再度点火された。開会期間中は会場内の観客のみから視認可能で、初めての例だった。大会後、聖火台は204個の花弁に分解されロンドン博物館等に保存されている。

- ・ 2002年ソルトレイク大会では、スタジアムに隣接する塔を聖火台として設置し、ここで点火され、競技中も会場内外から視認可能となっており、大会後もオブジェとして現存している。
- ・ 2006年トリノ大会では、スタジアムに隣接する塔を聖火台として設置し、そこで点火され、競技中も会場内外から視認可能となっており、大会後もそのまま存置されている。
- ・ 2010年バンクーバー大会では、点火はスタジアム内で行われたが、競技中は会場外に移され、大会後はメモリアルとして残っている。
- ・ 2014年ソチ大会では、スタジアム外で点火され、競技中も外に設置されていた。
- ・ なお、参考までに1980年モスクワ大会では、旧国立競技場と同様にスタンド内に設置されていた。
- ・ また、1988年ソウル大会では、トラックとスタンドの間に設置されていたが、会場内のみ視認可能だったと考えられる。
- ・ 大会2～3年前からセレモニーについて検討が開始されることから、2020年東京大会での聖火台の点火をどうするかは、リオ大会が終わってから検討することになる。競技期間中にどこで燃やすか、あるいはレガシーとしてどう残していくかといった課題もあり、場合によっては設計段階で考慮することも必要になると考えられる。そのため、ワーキング・チームで検討いただけるのは組織委員会としてもありがたい。

○組織委員会の説明に関して質疑

【中川総括審議官】

- ・ バンクーバーでは、聖火台を外に移設したのか、外にも同じような聖火台が設置されていたのか。
- ・ 年代によってスタジアムの屋根があるかないかなど事情は変わってきていると思うが、I O Cガイドラインがいつ頃から今の形になっているのか。

【中村組織委員会企画財務局長】

- ・ バンクーバーでは、外にも同じような聖火台が設置されていた。
- ・ I O Cガイドラインの改定の経緯については次回御報告したい。
- ・ I O Cガイドラインでは、会場内外両方から見える方がベターだが、どちらを優先するかとなればチケットを購入した会場内を優先すべきということになっている。

○スポーツ庁の高橋次長から、「(4)国内事例の報告」について説明があった。

- ・ 国内事例について、情報が少ないので、不確定なことも含めて分かったことを記載しているため、一部調査中としている。
(1964年東京大会)

- ・アジア大会の競技場として建設され、その時には聖火台があったが、当時は南側スタンドに設置されており、オリンピックが決まった後、バックスタンド中央最上部に移設された。
- ・聖火台は、アジア大会の競技場建設と合わせて設置されたため、おそらく国が負担したものと考えられる。

(1972年札幌大会)

- ・競技場は元々国が設置し、2000年までは国が北海道に無償貸与し、2000年に北海道に所有権を移した。
- ・聖火台については、組織委員会の報告書にロータリークラブから寄贈を受けたという記載があるため、ロータリークラブから現物給付を受けたと考えられる。
- ・聖火台登行用階段については、組織委員会：北海道：札幌市が2：1：1で費用負担したという記述も残されている。
- ・スタジアムの建設時期と聖火台の検討時期については、調査を行っているが、現時点ではつまびらかになっていない。

(1998年長野大会)

- ・国として直接的な資料はないが、競技場の設置者は長野市で、聖火台は組織委員会であったと考えられる。
- ・聖火台については、大会の3年程前から組織委員会が式典専門委員会で検討を開始したと、長野市担当者より聞いている。
- ・聖火台の費用負担は、東京ガスになっているようだが、オフィシャルサプライヤーとしての権利の対価としてサプライヤー契約に基づき提供したものと考えられる。

以上